

**自**分たちと同じ時代に生きている、イキのいいアートを見たいと思ったとき、どんな所に行ったらいいのでしょうか。多くの方はまず美術館を考えるのではないのでしょうか。

ここ20年ほどの間に、同時代の美術を紹介する拠点として、数多くの美術館が開館してきました。今では県立美術館をもたない県はほとんどありませんし、市立の美術館も珍しいものではなくなりました。

こうした美術館は、作品のコレクションをかかえ、年間にいくつかの展覧会を開催し、さまざまな普及事業を開催するといった一定の活動プログラムをもっています。こうした活動の蓄積によって、数多くの作家たちが掘り起こされ、美術の歴史が記述されてきました。同時に、これらの美術館が作家紹介の拠点となることで、同時代の作家を育てるという機能も期待されています。

**そ**の意味で美術館の果たす役割は大きいのですが、一方で、これらの事業の遂行には多大な予算を要するのも事実で、近年の不景気による税収の減少といった理由によって、多くの美術館において、事業の縮小や停滞を余儀なくされるという光景も我々は目の当たりにしています。

近年のこのような状況を背景にして、発表・紹介のための現場を、美術館の外に創り出していこうという試みが始まっています。市民による運動体が作家を支援し、発

表の場所や鑑賞者とのコミュニケーションの機会が作りだされているのです。

こうした活動においては、まず新しい美術館を建築するのではなく、使われなくなった建造物をリサイクルして有効活用する事例が多く見られます。廃校となった学校の校舎を利用した京都芸術センター、元は銀行だった横浜のBankARTの活動はよく知られているところですし、他にも空きビルや廃業した銭湯が展示の拠点として再生された例があります。こうした拠点における活動では、美術の専門領域にとらわれず、新しい発想に基づいて音楽・舞踊といった他の芸術ジャンルも横断するような企画が多く見られるのも特徴です。

**も**ちろん美術館を離れた活動は従来からあるのですが、今なぜこうした動向が注目されるほどの規模をもつようになったのでしょうか。それには、平成15年に特定非営利活動促進法が施行され、いわゆるNPO法人による、市民を主体とした活動が推進されるようになったこと、企業のメセナ活動が社会的認知を得て活動に対する助成の機会が増えたこと、などが理由としてあげられます。こうした活動に対して、政府でも芸術文化振興基金を設けて支援を行っています。さらにそれらに対する支援を発展させるため、特定公益増進法人制度のような税制上の優遇措置を拡充することも必要でしょう。

これらの活動は美術館と違って、新しい建物が街中に立ち上がるわけではありませんから、目に付きにくいかもしれません。しかしそのネットワークは着実に広がっています。イキの良いアートの現場に触れるために、そのような活動の機会を見つけて参加してみたいかがでしょうか。どの活動も、みなさんの積極的な参加を望んでいるはずです。



京都芸術センターは廃校となった旧京都市立明倫小学校の校舎を活用

文化部芸術文化課  
芸術文化調査官  
野口玲一

